

# 韓国系ニューカマーの心理社会的適応過程に関する質的研究 —大学講師を対象として—

A qualitative study of the psychosocial adaptation process in Korean newcomers teaching at a university in Japan

長谷川 みなほ

跡見学園女子大学大学院人文科学研究科 臨床心理学専攻

Minaho HASEGAWA

Division of Clinical Psychology, Graduate School of Humanities, Atomi University

## 要約

近年グローバル化により人々の移動はより顕著なものとなった。1970年代以降、来日し定住する外国人を「ニューカマー」と呼んでいる。ニューカマーの心理社会的研究は児童期の研究はあるが、成人の韓国系ニューカマーの研究は少ない。そこで、韓国系ニューカマーが日本に適応する過程を心理社会的に分析することにした。

大学で兼任講師をしている知的水準の高い韓国系ニューカマー4名を対象とした。来日以後に感じた困難とそれへ対処、欲しかった援助等について半構造化面接を行い、M-GTAを用いて分析した。その結果、来日後に感じた困難の大カテゴリーには、【国民性の違いによる困難】【コミュニケーション・コミュニティの困難】【差別】【経済的困難】が抽出された。困難への対処として【性格による対処】【韓国での経験による対処】【行動面での対処】【認知面での対処】【相談・援助による対処】が抽出された。欲しかった援助または現在欲しい援助として【コミュニケーション・コミュニティ】【その他】、日本に在住予定の韓国人にしたいアドバイスとして【コミュニケーション・コミュニティのすすめ】【努力】が抽出された。

困難について、エリクソンの発達課題における「親密さ」対「孤立」から考察した。困難に対する対処は、「問題解決」、「認知的再解釈」、「相談・サポート希求」、「回避」に分類した。これから来日するニューカマーへのアドバイスとして、コミュニティに参加すること、日本人とのコミュニケーションをとること、などが挙げられた。これは、ニューカマーを受け入れる日本側の支援としても重要な視点である。

【Key Word】 韓国、ニューカマー、困難、対処、M-GTA

## 問題と目的

近年グローバル化により人々の移動はより顕著なものとなった。日本では、新型コロナウイルス感染拡大のため停滞していた

ものの、外国人の受け入れは再開しつつある。2022年10月の訪日外客数は498,600人で、特に東アジア市場を中心に訪日外客数が大きく増加している（日本政府観光局、

2022)。この訪日外客数が2022年7月以降急増している国が隣国の韓国である。

古くから日本人はそのような海外から来日した者に対して、様々な呼び名を付ける文化があった。近年では、「オールドカマー」や「ニューカマー」と呼ばれることもある。「オールドカマー」とは、在日コリアンを中心とした戦前から定住する人やその子孫を指している。一方で「ニューカマー」は、1970年以降に来日し定住する外国人を指しており、この中には中国系や日系ブラジル人など南米系も含まれている(加藤, 2010)。

ニューカマー研究について、児童期では日本での適応過程に言葉の問題のほか、対人関係やアイデンティティ形成などの発達の問題が関与するなどの報告がある(山田, 2013)。岡村(2011)は、児童期のニューカマーが経験する学校生活での困難について測定する尺度(6因子)を開発した。このうち「同化要請」因子と「日本人の異文化理解不足」因子については、異文化を生きるマイノリティの子どもたちが普遍的に直面する可能性の高い困難であると考えられる。加賀美ら(2018)は、上記に挙げた岡村(2011)の研究について、「同化要請」因子と「日本人の異文化理解不足」因子は青年期の世代においての問題点として挙げている。

しかしながら、青年期以降に来日したニューカマーの研究は、児童期に比べると少ない。特に韓国系ニューカマーは、来日の経緯や目的が多岐にわたるにも拘わらず、オールドカマーと比較して彼らの現状はあまり知られていない。そこで本研究では、韓国系の成人ニューカマーの日本での心理

社会的適応過程について検討することにした。

## 方法

### 1. 調査方法

関東圏の大学で韓国語を教える韓国人ニューカマーである兼任講師男女4名を対象とした。インタビューは、対面あるいはZOOMによる遠隔で行った。

### 2. 面接方法

60分程度の半構造化面接を行った。質問項目は以下の通りである。

#### (1) 基本情報

- ①年齢、性別、日本に来た時期。
- ②学歴と職歴。

#### (2) 日本での適応の過程

- ③来日後困ったことや悩んだこと、それについて何か対処したか。

#### (3) 周囲の人や日本社会に求めたい援助

- ④良かったと思う、あれば良かったと思う援助について。

- ⑤これから日本で暮らす予定の韓国人にするアドバイス。

### 3. 分析方法

分析方法は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(Modified Grounded Theory Approach, 以下M-GTAと略記)を用いて解析する。M-GTAとは、ストラウスとグレーザーにより提唱されたグラウンデッド・セオリー・アプローチ(Grounded Theory Approach)を木下(2003, 2007)が改良したものである。

### 4. 倫理的配慮

研究の方法および、研究は匿名性の確保がされること、自由意志で行われること等を文書と口頭で説明した。跡見学園女子大

学研究倫理審査委員会で承認を得た（承認番号：倫院-22-001）。

## 結果

### 1. 対象者

対象者の性別は、男性2名、女性2名の計4名であった。平均年代は50代で、4名の平均在日年数は22.5年であった。また、4名全員が日本の大学院博士課程に進学しており、修了あるいは満期退学している。

### 2. M-GTAによる分析結果

#### 1) 概念の生成およびカテゴリーの生成

概念とは、複数の対象者の語りから同じような切片化された語りに命名したものである。本研究では、4名の調査対象者のデータから、最初は81の概念を抽出し、概念の削除、追加、統合、概念名の変更などの修正を行い、最終的には55の概念が生成

された。本研究では、対象者が4人と少なかったため、重要と思われるものは1人が話されたものでも抽出している。理論的飽和に至ったことを確認したうえで、概念の抽出作業を終わらせた。

抽出した概念は、(1) 来日前の韓国での状況、(2) 来日後に感じた困難、(3) 来日後に感じた困難をどう対処したか、(4) 当時欲しかった又は現在欲しい援助、(5) 日本に在住予定の韓国人にしたいアドバイスと質問ごとに5つのグループに分類した。さらに概念を、カテゴリーに分類した。概念と概念の関係を分析・検討しながら、カテゴリーに名前を付け、中カテゴリー、その上位概念の大カテゴリーを生成した。最終的に29の中カテゴリー、15の大カテゴリーが生成された(表1、表2、表3、表4、表5)。

表1 来日前の韓国での状況

大カテゴリー	概念	発話例
日本への興味	高校の選択科目	高校の選択科目で日本語を選択して興味を持った。
	大学での専攻	日本語専攻して興味を持った。
日本の印象	いじめが多い	学校でいじめが多いと聞いた。
	地震が多い	地震が多いイメージがある。

表2 来日後感じた困難

大カテゴリー	中カテゴリー	概念	発話例
国民性の違いによる困難	性格	(日本人) 細かい性格	韓国人はおおらかな性格だが、日本人は結構きめ細かい。
		(日本人) 柔軟性がない	韓国なら直接書類持って提出すれば良いが、日本ではダメだ、郵送しろって言う。
		(韓国人) おせっかい	韓国人はおせっかい。「これは違う、こうなさい」っていうことを何度も言う。
		(韓国人) 気前が良い	韓国人は気前が良い。日本人はセコイ。
	行動	細かい対応を要求される	(レジの仕事で) カゴに荷物を詰める時の細かさや、お金の表、裏も揃えるところ。
		さよならの挨拶をしない	韓国人は挨拶を言って別れるが、日本人は申し訳ないと思ってさよならを言わない。
		全てを言わない	日本人は言わなくても分かるよねって感じ。
		目上の人を敬わない	(日本と違って韓国は) 目上の人をすごく敬うみたいな社会。

	社会	割り勘	日本人は会食で、全員が揃うまで会費を払わずにずっと待って割り勘にする。
		喫煙	運転席からタバコを捨てる。禁煙席でも煙が入ってくる。
		参政権	選挙のときに、参政権がない自分は“違う”、“異質感”を感じる。差別に繋がる。
		デジタル化の遅れ	日本はデジタル系に関して遅れがある。
コミュニケーション・コミュニティの困難	コミュニケーション	言葉を通じない	言葉を通じないから、言葉の壁・障害を感じる。
		本音と建て前文化	本音を言わない。率直じゃない・表裏がある。
		発言の省略	韓国はたくさんしゃべる文化。日本はあまりしゃべらなくてもわかるよねという文化。
		プライベートのこともまで話さない	プライベートを秘密にしている感じ。お互い干渉しない。たまには、韓国のような濃い関係があったらいいと思う。
	コミュニティ	真の友人が作れない	深い人間関係を作ることが難しい。真の友達が作れない状況だった。
		相談相手がない	子供のことを相談する人があまりいない。情報共有ができない。
差別	差別経験	日本人の態度	もの扱いする。入管の職員は言葉遣いが荒い。
		犯罪を疑われる	切手を買う時、もたもたしていたら、店員が店頭の切手を盗まれるんじゃないかという態度を示した。
経済的困難	経済的困難	学業との両立	勉強するとお金がないし、お金が無いと生活できないというジレンマがあった。学生だった時は貧乏だった。

表3 来日後に感じた困難をどう対処したか

大カテゴリー	中カテゴリー	概念	発話例
性格による対処	多様性の受容	異文化を理解しようとする柔軟性	国際派。どこの国の文化とかにこだわらない。
		打たれ強い	打たれ強い。
	困難に立ち向かう精神	真面目	取柄は真面目なので日本語をマスターした。
韓国での経験による対処	主体性	主体性	日本の社会での付き合いに自分が主導してやっていこうという精神,
	兵役での経験	兵役での苦労経験	軍隊で苦労したことが力になった。
行動面での対処	福祉的支援	奨学金を受給する	文科省の奨学金をもらったことが安心材料になった。
	人との関わり方	積極的に人と関わる	積極的に自分でやらないと、損するのは自分。
		適切な距離を保つ	ある程度距離を置いた方がいい。こっちだけ全部しゃべるのはちょっと恥ずかしい。
	多忙さ	無我夢中に物事に取り組む	ガムシヤラだった。わき目も振らずだった。
	コミュニティ参加	多国籍の人たちと交流する	無国籍レストランみたいところで働いて、日本人を含めて交流を持てた。
認知面での対処	諦めによる受容	しょうがないと諦めて受容する	(入管で) 待たされるのはしょうがないと受け入れた。
	先入観	先入観をなくす	そんないじめがあるわけではないのに、いじめが多いという日本に関する先入観があった。先入観をなくすことが大事。
		日本への興味・関心	日本への興味・関心
相談・援助による対処	良好な人間関係	日本人と良好な関係を築く	日本語の先生など、優しい人にあたった。日本語を学ぶと同時に人に助けられた。夫とすべて話し合ったりした。やっぱり人です。
		多国籍の人と良好な関係を築く	バイト先の知り合いや、仲間に助けられた。

表4 当時欲しかった又は現在欲しい援助

大カテゴリー	中カテゴリー	概念	発話例
コミュニケーション・コミュニティ	相談相手	友人	腹割って何でもしゃべれるような人。
		チューター	日本語の間違いを修正してくれただけでなく、人間的な相談相手になってほしい。
	ニューカマーに対する対応	優しく接する	丁寧に、優しく、外国の人に接する改善してほしい。
	国際交流コミュニティ	国際交流コミュニティ	外国の人と接するコミュニティーを増やしてほしい。いろんな国の人たちが集い、その国の料理を作るなどの催しがあれば良い。
その他	政治に参加する権利	外国人の参政権があると良い	参政権ない状態で、税金は同じという矛盾を感じる。
	子育て支援	保育園	夜遅くまでやってる保育園があったらもっと便利だった。
	喫煙	徹底した禁煙	韓国のような厳しい禁煙文化に合わせてほしい。

表5 日本に在住予定の韓国人にしたいアドバイス

大カテゴリー	中カテゴリー	概念	発話例
コミュニケーション・コミュニティのすすめ	コミュニティ参加	多国籍との交流をしてほしい	日本人だけでなくいろいろな国籍の人とも交流してほしい。
		韓国人のコミュニティに参加する	教会など韓国人のコミュニティで、協力するのは、あまり過ぎない程度では良いと思う。
		趣味等のサークルに参加する	団体、サークル、習い事に入ったら友達が作れる。
努力	日本人とのコミュニケーション	疑問点は日本人に聞く	(ゴミ出しなど) 近所の人に聞いて、身につけたほうがトラブルが発生しない。
		知識を蓄える努力	日本語がちゃんとできるように勉強する。読める努力をする。
	異文化理解に努める	情報収集をする	留学生のコミュニティのウェブで情報を集める。
		期待しすぎない	日本人と韓国人は見た目が同じなので、同じだと勘違いする。なんでも思わないで。あまり期待しすぎない。
		先入観を持たない	日本についての先入観の影響で失敗したことがあった。先入観はあまり持たない。

## 2) ストーリーラインと結果図

ストーリーラインとは、抽出したカテゴリーや概念を用いて文章化したものである。来日前の韓国での状況と、来日後の状況に大きく分けて分析をした。【 】は大カテゴリー、< >は中カテゴリー、・ \_\_\_\_ は概念、「 」は調査対象者の発言を示す。

### (1) 来日前

#### ①日本への興味

韓国での学歴は、高校、大学、専門学校卒業である。来日したきっかけは、【日本

への興味】であった。日本語が・高校の選択科目であった、あるいは・大学で専攻したということがきっかけであった。

#### ②日本への印象

来日前にもっていた【日本の印象】としては、・いじめが多い、・地震が多いであった。

### (2) 来日後

#### ①来日後に感じた困難

大カテゴリーとして、【国民性の違いによる困難】、【コミュニケーション・コミュニティの困難】、【差別】、【経済的困難】が抽出された。

(i) 【国民性の違いによる困難】

中カテゴリーとして<性格>、<行動>、<社会>が抽出された。

<性格>

日本人は、・細かい性格、・柔軟性がないという概念が抽出された。

発語例では、「韓国人はおおらかな性格だが、日本人はきめ細かい」という発語のほか、「日本人は書類提出も窓口で直接提出ではなく、郵送しろと言われる」など日本人の柔軟性のなさを指摘したものがみられた。一方韓国人の性格は、・おせっかい、・気前がよいという概念が抽出された。発語例では、「韓国人はこれは違う、こうしなさいと何度も言い」・おせっかいだと言う。しかし、このおせっかいという言葉は、批判的に使っているのではない。韓国人の性格と日本人のあっさりした性格の対比として挙げている。・気前がよいというのは、韓国人に比べて日本人の気前の悪さがみられることとしてあげている。

<行動>

・細かい対応を要求される、・さよならの挨拶をしない、・全てを言わない、・目上の人を敬わない、・割り勘、・喫煙の概念が抽出された。

発語例では、「レジの仕事でカゴに荷物を詰める時の細やかさや、お金の表裏を揃えるところ」、「韓国人は挨拶を言って別れるが、日本人は申し訳ないと思ってさよならを言わない」があった。韓国人の方が多くしゃべる文化であり、何も告げずに去ることには、どこか寂しさを感じていることが窺える。さらに、「日本人は言わなくても分かるよねっていう感じ」という発語もあった。韓国のように多くの情報量を話す

文化圏の人達にとっては、急に省略された話し方には戸惑いを感じる事が窺える。韓国は「目上の人をすごく敬うみたいな社会」があった。しかし、日本の入国管理局の職員の対応について言及するものに、外国人ならばタメ口で説明されるがあった。日本人の・割り勘をについて、「日本人は会食で、全員が揃うまで会費を払わずにずっと待って割り勘にする」がみられた。韓国は、その集団の中の誰かがまとめて会費を払うという文化がある。日本の・喫煙事情について「運転席からタバコを捨てる」、「禁煙席でも煙が入ってくる」があった。

<社会>

・参政権、・デジタル化の遅れという概念が抽出された。日本に住む外国人には・参政権がないことが挙げられた。例えば、「選挙のときに、参政権がない自分は“違う”、“異質感”を感じる」、「差別に繋がる」というものである。このことから、日本在住の年数が長くようやく馴染めてきたと感じたとしても、選挙に行くことが出来ない韓国系ニューカマーは日本人とは違う国な存在のように改めて実感させられることが推察される。また、「日本はデジタル系に関して遅れがある」と・デジタル化の遅れを感じ、日本に来て不便さを感じている。

(ii) 【コミュニケーション・コミュニティの困難】

中カテゴリーとして、<コミュニケーション>、<コミュニティ>が抽出された。  
<コミュニケーション>

日本人とのコミュニケーションについて、・言葉が通じない、・本音と建て前文

化、・発言の省略、・プライベートのことまで話さないという概念が抽出された。

発語例では、「言葉が通じないから、言葉の壁・障害を感じる」と、来日直後に、事前に韓国で日本語を勉強していても、来日してすぐ日本語の難しさを感じるということが明らかになった。日本人は「本音を言わない」、「率直じゃない・表裏がある」と日本人の国民性として・本音と建て前文化を使い分けがちで、自己開示に消極的である。・発言の省略の発語例では、「韓国はたくさんしゃべる文化」、「日本はあまりしゃべらなくてもわかるよねという文化」があった。日本人が・プライベートのことまで話さないということについて、「プライベートを秘密にしている感じ」、「お互い干渉しない」、「たまには、韓国のような濃い関係があったらいいと思う」といった発話がみられた。韓国人からすると壁を作られ、距離を取られているように感じてしまうのではないかと推察した。

<コミュニティ>

・真の友人が作れない、・相談相手がないという概念が抽出された。・真の友人が作れないの発語例では、日本人と「深い人間関係を作ることが難しい」、「真の友達が作れない状況だった」といった発話がみられた。異文化ということに加えて、新たな人間関係を築いていかなければならない状況になることが多い、ニューカマーだからこそその困難だと考えられる。・相談相手がないの発語例では、「子供のことを相談する人があまりいない」、「情報共有ができない」がみられた。相談相手がないという孤立感による困難さを強く感じたことが垣間みえる。

(iii) 【差別】

【差別】は、中カテゴリーとして、<差別体験>が抽出された。

<差別経験>

来日後の困難として、・日本人の態度、・犯罪を疑われるという概念が抽出された。

・日本人の態度では、日本人が韓国人を含めたニューカマーに対して「もの扱いはする」、「入管の職員の言葉遣いが荒い」という発話がみられた。「切手を買う時、もたもたしていたら、店員が店頭の切手を盗まれるんじゃないかという態度を示した」というように実際には何も悪いことをしていないにも関わらず日本人店員に・犯罪を疑われるという発話がみられた。日本人の外国人客に対する歪んだ認知がある可能性があるかと推察された。

(iv) 【経済的困難】

中カテゴリーとして、<経済的困難>が抽出された。

<経済的困難>

・学業との両立という概念が抽出され、「勉強するとお金がないし、お金が無いと生活できないというジレンマがあった」、「学生だった時は貧乏だった」といった発話が多くの調査対象者から語られた。自国の韓国ではなく、留学先である日本の大学院で高度な研究をしながら、生活をしていくために、仕事も同時並行で行っていくことに困難さを強く感じている。

②来日後に感じた困難をどう対処したか

【性格による対処】、【韓国での経験による対処】、【行動面での対処】、【認知面での対処】、【相談・援助による対処】が抽出された。

(i) 【性格による対処】

中カテゴリーとして、＜多様性の受容＞、＜困難に立ち向かう精神＞、＜主体性＞が抽出された。

＜多様性の受容＞

・異文化を理解しようとする柔軟性という概念が抽出された。発話者は自身のことについて、「国際派」、「どこの国の文化とかにこだわらない」と発話しており、・異文化を理解しようとする柔軟性を意識して、異国である日本で生活しているということがあがった。これらは、日本で生活する上で必要となる異文化コミュニケーションに繋がっているということが明らかとなった。

＜困難に立ち向かう精神＞

・打たれ強い、・真面目という概念が抽出された。困難に直面した際に、自身の「打たれ強い」性格によって、困難に屈せず立ち向かっていくことが、日本で生活する上でも役に立ったということが推察された。さらに、「取柄は真面目なので日本語をマスターした」という発話例がみられた。来日以前から知的好奇心が旺盛で、・真面目に取り組む姿勢が役立ったということが示唆された。

＜主体性＞

・主体性という概念が抽出された。発話例では「日本の社会での付き合いに自分が主導してやっていこうという精神」のものがみられた。自身の知らないことが数多くある異国の地でも受け身で物事に向き合うのではなく、常に・主体性を持って取り組もうとする姿勢が功を奏したと考えられる。

(ii) 【韓国での経験による対処】

中カテゴリーとして、＜兵役での経験＞が抽出された。

＜兵役での経験＞

・兵役での苦労経験という概念が抽出された。発話例では、来日前の韓国における「軍隊で苦労したことが力になった」があった。韓国の軍隊で苦労した経験が、日本でのストレス耐性の一助になったのではないかと推察される。

(iii) 【行動面での対処】

中カテゴリーとして、＜福祉的支援＞、＜人とのかかわり方＞、＜多忙さ＞、＜コミュニティ参加＞が抽出された。

＜福祉的支援＞

・奨学金を受給するという概念が抽出された。発話例では、「文科省の奨学金をもらったことが安心材料になった」との発話のみられた。個人が外国人やその家族を支援するといったミクロな支援だけでなく、・奨学金を受給するといった行政や団体が行う支援が、ニューカマーの人たちの生活に役立っていたことが明らかとなった。

＜人とのかかわり方＞

・積極的に人と関わる、・適切な距離を保つという概念が抽出された。・積極的に人と関わるでは、「積極的に自分でやらないと、損するのは自分」という発話例がみられた。一方で、・適切な距離を保つの発話例では、「ある程度距離を置いた方がいい」、「こっちだけ全部しゃべるのはちょっと恥ずかしい」がみられた。積極的に関わろうと意識することを重要視する人がいる一方、距離をとって接することが日本人と上手に付き合っていくことを重要視している人もいる。



<多忙さ>

・無我夢中に物事に取り組むという概念が抽出された。例えば、「ガムシヤラだった」、「わき目も振らずだった」という発話がみられた。大学院で研究をしながら、お金を稼ぐといったマルチタスクが求められる状況下で、取り組むべきことを一つ一つ無我夢中に取り組むことで乗り切っていたことが示唆された。

<コミュニティ参加>

・多国籍の人たちと交流するという概念が抽出された。「日本人を含めて交流を持てた」という発話から、韓国人が多く働いている職場ではなく、あえて様々な国籍の人たちと交流ができる仕事を選ぶことで、情報の収集をしたり、新たな人間関係が構築できるように行動して、困難に対処していると窺える。

(iv) 【認知面での対処】

中カテゴリーとして、<諦めによる受容>、<先入観>、<日本への興味・関心>が抽出された。

<諦めによる受容>

・しょうがないと諦めて受容するという概念が抽出された。入国管理局でビザの更新に時間がかかることについて「待たされるのはしょうがないと受け入れた」という発話がみられた。不快に感じる場面に直面した際においても、時には諦めて受け入れていくという対処方法をとることもあると判明した。

<先入観>

・先入観をなくすという概念が抽出された。発話例では、「そんないじめがあるわけではないのに、いじめが多いという日本に関する先入観があった」、「先入観をなく

すことが大事」という発話がみられた。来日前に持っていた日本に対する誤った固定観念により認知が歪み、日本での生活を過ごしにくくさせていたと示唆された。

<日本への興味・関心>

・日本への興味・関心という概念が抽出された。発話例として、「日本が面白いと思って勉強した」がみられた。知的好奇心が根底にあると困難を乗り越える力となりえるということが示唆された。

(v) 【相談・援助による対処】

中カテゴリーとして、<良好な人間関係>が抽出された。

<良好な人間関係>

人間関係について、日本人と良好な関係を築く、多国籍の人と良好な関係を築くという概念が抽出された。「日本語の先生など、優しい人にあたった」、「日本語を学ぶと同時に人に助けられた」、「夫とすべて話し合ったりした」、「やっぱり人です」があった。来日後に、発話者に親切に接してくれた人や、丁寧に対応してくれた人、優しい人に巡り合えたり、親身になって相談できる相手が周りにいたこと、またはそのような人と知り合うことで、日本人と良好な人間関係を築けたことができたという成功体験ができ、自尊心の向上に繋がったのではないかと感じられた。

「バイト先の知り合いや、仲間に助けられた」といった多国籍の人と良好な関係を築くことで良かったという発話例もみられた。助けてもらおうということは、発話者が多国籍の人たちに援助要請が出来るような関係を持っていることが示唆され、それは日頃のコミュニケーションが円滑になされている結果ではないかと示唆され

る。

③当時欲しかった又は現在欲しい援助

大カテゴリーとして、【コミュニティ・コミュニケーション】、【その他】が抽出された。

(i) 【コミュニティ・コミュニケーション】

【コミュニティ・コミュニケーション】は、中カテゴリーとして、＜相談相手＞、＜ニューカマーに対する対応＞、＜国際交流コミュニティ＞が抽出された。

＜相談相手＞

・友人、・チューターという概念が抽出された。発話例では、「腹割って何でもしゃべれるような人」と何でも話することができる・友人を求める発話例や、学生時代の・チューターを思い出して、「日本語の間違いを修正してくれただけでなく、人間的な相談相手になってほしい」という発話がみられた。本音と建て前の文化やプライベートなことを極力話さない日本人が多かったからこそ、相談ができる相手が欲しかったという学生時代に叶わなかった願いが語られた。

＜ニューカマーに対する対応＞

＜ニューカマーに対する対応＞について、・優しく接するという概念が抽出された。発話例では、「丁寧に、優しく、外国の人に接する改善してほしい」というものがみられた。

＜国際交流コミュニティの増加＞

・国際交流コミュニティの参加という概念が抽出された。「外国の人と接するコミュニティを増やしてほしい」、「いろいろな国の人たちが集い、その国の料理を作るなどの催しがあれば良い」といった発話例がみ

られた。発話者はこのようなコミュニティには、来日後の不安な気持ちをなくすことや、友人作りといった関係性の幅を広げること、また情報収集等といったことが出来る可能性が高いと考えている。

(ii) 【その他】

【その他】は、中カテゴリーとして、＜政治に参加する権利＞、＜子育て支援＞、＜喫煙＞が抽出された。

＜政治に参加する権利＞

・外国人に参政権があると良いという概念が抽出された。日本に在住する外国人について、「参政権ない状態で、税金は同じという矛盾を感じる」といった発話例がみられた。同じ国に住んでいて、日本人と同じだけの納税をしているにも関わらず、外国人だからという理由で選挙に参加できないことに不満を感じていることが窺われた。

＜子育て支援＞

子育てにおいては、・保育園という概念が抽出された。例えば、「夜遅くまでやってる保育園があったらもっと便利だった」という発話がみられた。

＜喫煙＞

・徹底した禁煙という概念が抽出された。例えば、「韓国のような厳しい禁煙文化に合わせてほしい」という発話例がみられた。元々禁煙が徹底されてきた韓国で育っただけに、日本の喫煙文化のマナーが悪いことに強い不満を抱いていることが窺えた。

④日本に在住予定の韓国人にしたいアドバイス

日本に在住予定の韓国人にしたいアドバ

イスの大カテゴリーとして、【コミュニティ・コミュニケーションのすすめ】、【努力】が抽出された。

(i) 【コミュニティ・コミュニケーションのすすめ】

中カテゴリーとして、＜コミュニティ参加＞、＜日本人とのコミュニケーション＞が抽出された。

＜コミュニティ参加＞

・多国籍との交流をしてほしい、韓国人のコミュニティに参加する、趣味等のサークルに参加するという概念が抽出された。・多国籍との交流をしてほしいでは、「日本人だけでなくいろいろな国籍の人とも交流してほしい」という発話がみられた。また、「教会など韓国人のコミュニティで協力するのは、し過ぎない程度ではよいと思う」があった。・韓国人のコミュニティに参加することを勧める発話もみられた。日本人の友人を作ることについて、「団体、サークル、習い事に入ったら友達が作れる」といった発話がみられた。自分の興味や関心のある趣味等のサークルに参加することで、日本人の友人が作れるかもしれないということだと推察される。

＜日本人とのコミュニケーション＞

・疑問点は日本人に聞くという概念が抽出された。日本人とのコミュニケーションでゴミ出しなどについて「近所の人に聞いて、身につけたほうがトラブルが発生しない」という発話がみられた。日頃感じた疑問点は日本人に聞くように心がけることで、日本人とのコミュニケーションもとることができ、住民間のトラブルが発生を防ぐことが出来るということが明らかとなった。

(ii) 【努力】

＜知識を蓄える努力＞、＜異文化理解に努める＞が抽出された。

＜知識を蓄える努力＞

・日本語学習を徹底する、情報収集をするという概念が抽出された。日本に在住するならば、「日本語がちゃんとできるように勉強する」、「読める努力をする」といった努力を怠らないように呼び掛ける発話例がみられた。日本語で苦勞してきたからこそ、日本語を入念に学び、文字が読めるように努力するという基本を忘れずに努力していくこと、また学生の場合は、「留学生のコミュニティのウェブで情報を集める」といった発話例がみられ、利用できるウェブサイトや、コミュニティには積極的に参加していき、情報収集をすると良いというアドバイスがあった。

＜異文化理解に努める＞

・期待しすぎない、先入観を持たないという概念が抽出された。「日本人と韓国人は見た目が同じなので、同じだと勘違いする」、「何でと思わないで」、「あまり期待しすぎない」といった発話例がみられた。似ていたとしても、日本と韓国は別々の国であり、どこかに違いは必ずあることを念頭に接していかなければならず、期待しすぎないことが重要であると伝えたいのではないかと感じた。加えて、「日本についての先入観の影響で失敗したことがあった」、「先入観はあまり持たない」という発話例がみられた。日本や日本人に対する先入観を持たないようにして、一人の人間として相手と接していくことが大切だということが推察された。

以上述べたストーリーラインを結果図に示した(図1)。結果図の「・」は、分かりやすい例を挙げるため、大カテゴリー、

中カテゴリー、概念、発話例のいずれかから載せた。

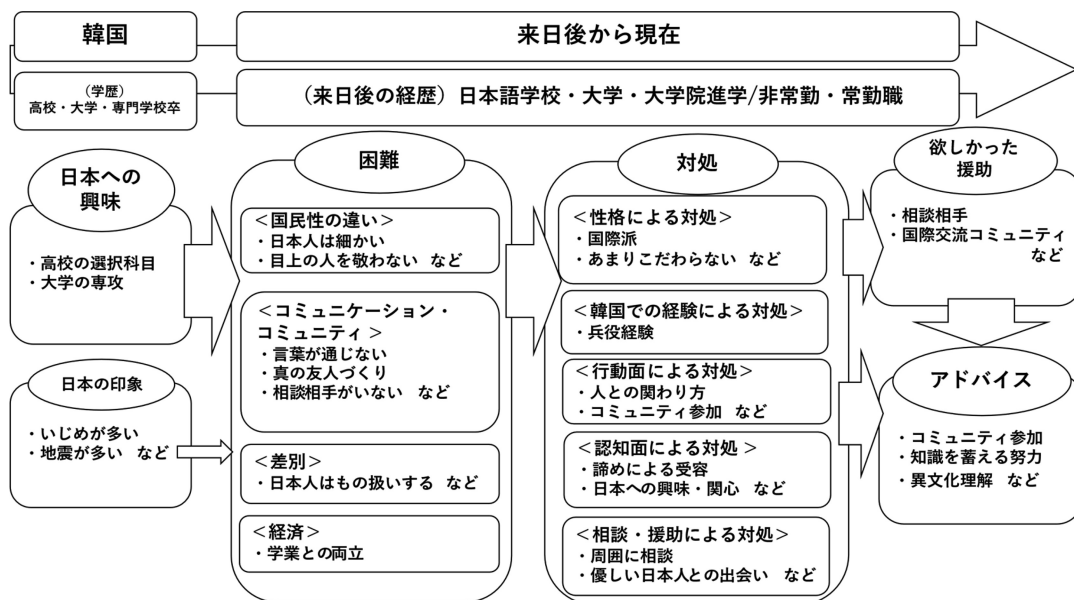


図1 結果図

## 考察

### 1. 対象者の特徴

対象者は、日本の大学院博士課程を修了あるいは満期退学しており、大学で講師を務めているという背景が共通している。均一な集団に対象を絞ることで、知的水準の高い韓国人が、どのような困難を感じ、どのように対処して日本に適応していったかを明らかにした。韓国の教育の特徴は、日本と同様高等教育への進学率が高い(84.0%)ことである(文部科学省, 2022)。2012年以来、政府は高等教育の機会に飢えているすべての人を支援することを目的として、全国奨学金プログラムを実施するといった手厚い教育体勢を築いている(Ministry of Education, 2022)。

### 1. 困難について

対象者の困難のうち、最も共通して語られた困難は「学業との両立」であった。一人の対象者は「勉強するとお金がないし、お金が無いと生活できないというジレンマがあった」と語っていた。ジレンマと折り合いをつけることが早急に要求された課題であったと推察される。

現在の困難よりも来日直後に感じた困難があげられたことも特徴であった。対象者が来日した時期は、エリクソンのいう発達段階の「若い成人期」に当たる。伊藤(2015)は、この「若い成人期」の課題について、「友人や配偶者と親密な関係を確立することが期待され、それに失敗すると、他人との交渉を避け、社会的な孤立に陥ってしまう」と述べている。「若い成人期」の課題は、来日間もないニューカマー

にとって困難な課題であったことがインタビューから推察された。韓国に住んでいた時と違い、年齢、文化や価値観が異なる日本社会の中で、自分にふさわしい場所や役割を見い出すことによって、韓国時代に夢描いた理想の留学像と現実の橋渡しをしながらも、内的連続性と社会的同一性を獲得しなければならないからである。

## 2. 対処について

次に今回調査対象者が語られた困難に対して行った対処からは、Lazarus & Folkman (1984) のストレスモデルをもとに考察する。ストレスモデルは、(1) ストレッサー、(2) 認知的評定、(3) 対処行動、(4) ストレス反応という過程を経る(島津, 2002)。ニューカマーが感じた困難はストレッサーに該当する。これに対し、対象者はさまざまな対処(coping: コーピング)を行っていた。対処行動には特徴的なパターンがあり、これを対処スタイル(coping style)と呼ぶ。有名なのは、Lazarus & Folkman (1984) (1) 問題焦点型コーピング、(2) 情動焦点型コーピングの分類である。宮岡(2022)は対処スタイルを(1) 問題解決、(2) 認知的再解釈、(3) 相談・サポート希求、(4) 回避に分けている。

本研究で、対処として大カテゴリーとしてあげられたのは、【性格による対処】【韓国での経験による対処】【行動面での対処】【認知面での対処】【相談・援助による対処】である(表4)。この大カテゴリーに含まれる概念名によって対処を分類してみた。

(1) 問題解決には、「打たれ強い」、「真面目」、「主体性」、「兵役での苦勞体験」、

「奨学金を受給する」、「無我夢中で取り組む」。

(2) 認知的再解釈には、「異文化を理解しようとする柔軟性」、「先入観をなくす」、「日本への興味・関心」。

(3) 相談・サポート希求には、「積極的に人と関わる」、「多国籍の人たちと交流する」、「日本人と良好な関係を築く」、「多国籍の人と良好な関係を築く」。

(4) 回避には、「適切な距離を保つ」、「しょうがないと諦めて受容する」。

多かったものは、積極的な対処である「問題解決」であった。その行動をおこす基礎となった【性格】が多くこの問題解決に入っていた点も注目される。打たれ強い、真面目等の性格で、多くの困難を乗り越えて、日本に適応していったことが推察される。次に多い対処スタイルは、(3) 相談・サポート希求であった。「積極的に人と関わる」「多国籍の人たちと交流する」ことは、相談をし、サポートを受ける機会を増加させる。

## 3. 欲しかった支援・援助について

今回複数人の調査対象者から、日本で仲の良い友人が作れなかったこと、困難に感じていたことは友人ではなく配偶者に相談していたという語りもみられた。感じた困難が来日してすぐの彼らは来日した当時は全員20~30代の留学生であり、その時が最も困難に感じた出来事の語りが多かった。そのことから、来日してすぐの特に若い世代のニューカマーには、相談できる友人や、相談相手が必要になると推察される。加賀美・岡野(2002)は、留学生支援について援助を必要としている留学生の社会的資源の査定を行ったり、留学生自身の自己

解決能力の程度を見極めてから、社会・文化・集団・個別レベルでの融合した援助方法をとるべきだと述べている。留学生は日本で生活する中で困難を感じた際に、相談する先が大学のカウンセラー（心理職）である可能性もあれば、チューターを頼る可能性も十分考えられる。加賀美・岡野（2002）は、援助ニーズの高い留学生に、チューターが関わる場合には、留学生の危機への対応策の訓練や教育危機対応の際のコンサルテーションが必要であると述べている。

以上のことから、留学生支援を、個人の問題だけに焦点を当てるのではなく、組織の問題として、多様な専門家や、非専門家と連携をとりながら、包括的にコーディネーションと統括を行い、コミュニティ全体で考えていくことが、ニューカマーにとって必要な支援であったと示唆される。

#### 4. 日本に在住する人へのアドバイスについて

これから来日する予定の韓国人に向けたアドバイスの中には、「多国籍との交流をしてほしい」、「韓国人のコミュニティに参加する」といったコミュニティ参加を勧めるアドバイスが複数あった。野田（2016）は、外国人が日本の利用可能な行政や地域サービスについて無知であることを問題として挙げている。外国人は自分の国での行政や地域サービスを、日本に当てはめて考える人が多く、日本人側が使えるサービスについてしっかり教えてあげないと日本の行政サービス、特に地域や福祉のサービスに関しては利用できないだけでなく、理解出来ていないと警鐘を鳴らしている。以上のことから、日本人の外国人への情報発

信しようとして積極的に臨むことが、情報過疎地にいるとされる外国人支援に役立つのではないかと感じた。

本研究の限界と今後の展望としては、本研究では、調査対象者が4名と少なかった。今後、対象者を増やし検討を重ねていく必要があると考える。仮説モデルとして結果図を作成したが、今後は、得られた知見を臨床的な経験と照らし合わせていく取り組みも有効であろう。

研究にご協力いただきました4名の講師の方に深く感謝申し上げます。ご指導いただいた宮岡佳子教授に御礼申し上げます。この研究は令和4年度跡見学園女子大学大学院学生研究奨励金の交付を得て行った。利益相反はない。

#### 引用文献

- 伊藤恵子（2015）. 教育・保育・子育て支援のための発達臨床心理学. 文化書房博文社, pp98-pp99.
- 加賀美常美代・岡野禎治（2002）. 来日早期にうつ病に至った留学生の症例報告-医療と教育の連携による奏功例. こころと文化, 多文化間精神医学会誌, 1 (1), 63-72.
- 加賀美常美代・小松翠・黄美蘭・岡村佳代（2018）. 多文化就労場面における日本人社員の葛藤解決方略と規定要因: 労働価値観, 外国人社員への就労意識に着目して. 人文科学研究, 14, 154-167.
- 加藤剛（2010）. もっと知ろう!!わたしたちの隣人-ニューカマー外国人と日本社会. 世界思想社, pp13-16.

- 木下康仁 (2003). グランデッド・セオリー・アプローチの実践. 弘文堂.
- 木下康仁 (2007). ライブ講義M-GTA実践的質的研究法修正版グランデッド・セオリー・アプローチのすべて. 弘文堂.
- Lazarus R.S. & Folkman S (1984). Stress, appraisal, and coping. Springer Publishing.
- Ministry of Education (2022). Education system in Korea Overview. <http://english.moe.go.kr/sub/infoRenewal.do?m=0301&page=0301&s=english> (2022年12月24日取得).
- 宮岡佳子 (2022). 発達障害をもつ成人女性の困難と対処行動—内容分析による検討—. 跡見学園女子大学心理学部紀要, 4, 37-51.
- 文部科学省 (2022). 「諸外国の教育統計」令和4 (2022) 年度版. [https://www.mext.go.jp/content/20221014-mxt\\_chousa02-000025226\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20221014-mxt_chousa02-000025226_1.pdf) (2022年12月24日取得).
- 野田文隆・秋山剛 (2016). あなたにもできる外国人へのこころの支援—多文化共生時代のガイドブック—. 岩崎学術出版社, pp52-61.
- 日本政府観光局 (2022). 訪日外客数. [https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/data\\_info\\_listing/pdf/20221116-monthly.pdf](https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/data_info_listing/pdf/20221116-monthly.pdf) (2022年12月24日取得).
- 岡村佳代 (2011). ニューカマー生徒が経験する学校生活における困難とその対処行動—中学生と高校生を中心に—. 異文化間教育, 34, 90-105.
- 島津明人 (2002). 心理学的ストレスモデルの概要とその構成要因. 小杉正太郎 (編著) ストレス心理学. 川嶋書店. pp31-58.
- 山田有芸 (2013). ニューカマーの子どもの小学校における支援ニーズ. 日本教育心理学会第55回総会発表論文集, 635.